

統計達人がものした日本人論 — 本川裕『はずれ値だらけの日本人』—

同業者の調査を論評するのは難しい。その昔、他所様調査をピンク色調査と評して酷く怒られ、出禁にされた。本書著者は日本のシンクタンク草分けの財団法人国民経済研究協会で長年調査研究に携わってきた本川裕さんの国際比較。私如き俄か研究員が論評するには、いささか敷居が高い。(菊地実)

煙に巻かれた

国民経済研究協会は戦後間もなく商工省・農林省・文部省三官共管で設立された。マクロ経済分析が得意。それは経済安定本部・経企庁に繋がっていく。私が余暇開発センター俄か研究員になった頃勉強会で同協会主任研究員として大活躍されていた田中直毅さんのマクロ景気論を聴きに行った。バブル直前のことである。ところが内容がほとんどわからなかつた。こつちの学識不足もさることながら今になってみると難しい用語で煙に巻かれたような気もする。

日本のシンクタンクの流れは、諸説あるものの大風呂敷後藤新平が育てた満鉄調査部に行き着く。後に野村総研社長・会長としてNRIを牽引した佐伯喜一さんもそういう説だった*1。本書でも触れられているが国民経済研究協会稲葉秀三さんも懐かしいお名前。稲葉さんは企画院出身いわゆる官庁エコノミストの走り。戦後は産経新聞社長のほか政官財をつなぐ人物として広く活躍されていた。補助金団体責任者で報告書契約の際度々名前を目にした。

＜図表1＞本書の構成

- 第1章 日本人の実力はいかほど
- 第2章 しみこんだ日本人の省エネ体質
- 第3章 日本人のパッシブ志向を示すいくつものデータ
- 第4章 信じるのはちがう! 信じないのもちがう!
- 第5章 風変わりな男と女の国
- 第6章 政治や国家、敬してこれを遠ざく
- 第7章 世界とのズレが大きい「日本人の常識」:
じつは未知の可能性

(本書より)



＜星海社新書＞

国際比較で見る日本のユニークさ

著者本川裕さんはWEB「社会実情データ図録」を二十年間主催している統計調査大先達。本書では国際比較データを駆使して、ユニークな日本人論を展開している

＜図表1＞。

経済成長と寿命

一人当たりGDPは87年と2000年に二度銀メダル。バブル崩壊で金融機関がどんどん潰れた1990年代でも5回の銅メダル、ところが2001年からは釣瓶落としてランキングが下がり、2010年前後伸びたものの現在は24位。すぐ下は韓国、スペイン、ポルトガル、ギリシャ! ところで上位常連ルクセンブルグ、アイスランド、ノルウェー。これには円高・円安要因も大きい。一方、平均寿命は、1960(昭和35)年、全28カ国中24位とびりつカスだったが、高度経済成長時代の1981年から2010年まで金メダル。2005年以降香港に譲って銀メダルとなっている。日本と同じく伸びていた米国が1980年を境にランキング落とし、最下位になっている。「経済でトップの国が厚生水準

で最下位の国なのである」(24頁)。階層文化・クスリ・銃が問題?

日本人は小柄だった。幕末黒船、僅か二千トンのヨレヨレフリゲート艦に度肝を抜かれた江戸人。実はペリー提督の巨大さ(八尺四寸192cm以上)にも驚いた^{*2}。幕末・明治、小柄だった日本人身長は大正年間から伸びた<図表2>。一方日本人はスリムである。その理由はカロリー消費の少なさ「省エネ」にある。筆者は「先進国で最もスリム体型を米食に」求めている。

<図表3>に見られるように、1990年を境に日本人のカロリー供給は減っている。そそかしい人は、カロリー供給量減少が経済低迷に繋がるなんて書きそうだ。私は、島国が動物を小さくする(象もスマトラトラも)という仮説を持っている。

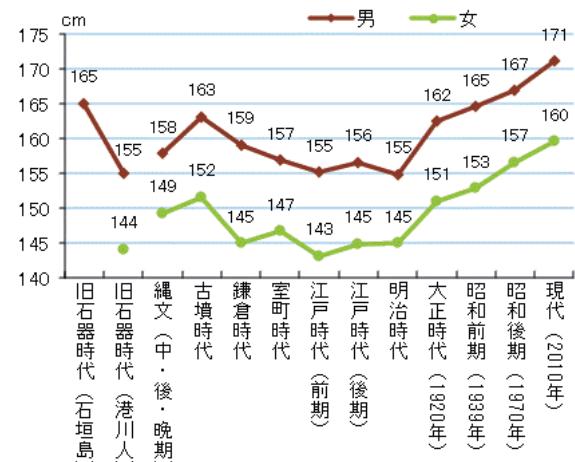
価値観調査の難しさ

身長・カロリー・GDPといった客観的指標がある場合はいいとして、文化などの「価値観」比較は意外に難しい。例えば「無宗教」に日本人は比較的簡単にイエスと答えがちだがキリスト教・イスラム教では相当勇気を要する答えである。「レジャー」「バカンス」という用語も、英仏と日では定義・イメージそのものに大きな開きがある。

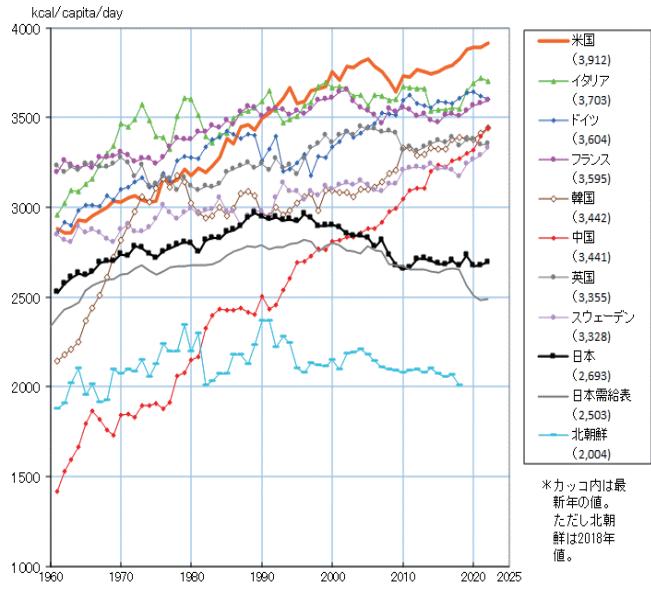
日本は「お酒を飲むことが悪いと思わない」四十カ国中一位(2013年、ビューリサーチセンター)の一方で、お酒に弱いことでも知られている。

本書で紹介している中で一番関心を持ったのは「リスクに対する各国意識調査の結果」(OECD成人スキル調査、2019年、40カ国)で、リスクを危険と回答したのは79.6%と7位だが、好機と回答したのは15.3%の28位とないこと。さらにOECDのPISA調査では「世界一失敗を恐れる日本の中学生」という結果も出ている(108-111頁)。文明開化時代洋書にある「競争」を不謹慎と論じた儒者

<図表2>日本人の平均身長の超長期変化



<図表3>1人1日当たり供給カロリーの推移



(図表2・図表3出典:「社会実情データ図録」)

がいたが、「和をもって尊し」文化は今に続いているのか?行動経済学『プロスペクト理論』(1979年)で論じられているように、バブル崩壊以降「損失回避の法則」が日本社会のエースになっているような気がしてならない。

本川氏は統計専門家らしく相關関係と因果関係を厳密に区分して論じているが、本当に日本人はユニークな存在のようだ。

*1:「シンクタンクは商売だけでなく未来的なテーマを持つべき」と語っていた。

*2:日本側は力士を動員して対抗した。体重はいいが、背は小さかったようだ。

■筆者/ 本川 裕(ほんかわ ゆたか)1951年神奈川県生まれ。東大農学部農業経済学卒。同大学院終了。財団法人国民経済研究協会常務理事・研究部長。現在アルファ社会科学主席研究員。著者多数

■書誌/『統計で問い合わせ直す はずれ値だらけの日本人』竹内書店新社、1967年11月発行。四六判・468頁。